

八月二八日

午前中、原稿書き。午後、研究室。幾つかの打合わせ。

八月二九日

十時半内閣府。十三時四十五分研究室戻り。沖縄のプロジェクトと上海ワークシヨップが少しでも関係づけられると良いのだけ。十五日日本フィンランド・デザイン協会理事会。十月のフィンランド・デザイン展の打合わせ。フィンランドはナシヨナル・プロジェクトの一環としてこのプロジェクトに取組んでいる。それに対して日本側は極めてパーソナルな対応で、心細いところもあるが、乗りかかった船だ。頑張ってみよう。十八時研究室に戻る。何件か相談に乗り、二〇時修了。

八月三〇日

昨日、山口勝弘先生から葉書が届いていた。レイアウトが面白くてHPに公開したい位だが、やはり、それは止める。この辺りがHPの展開に無くてはならぬボーダーラインだろう。藤野忠利にスケッチ送る。十四時学生とのミーティング。九月一日から本格的な秋シーズンである。最初のミーティングはキチンと構成した、クオリティーの高いモノにしよう。

八月三十一日

久しぶりに終日読書。関川夏央の「世界とはいやなものである」この評論家には若い頃会った記憶がある。鶴見俊輔さんに近い視点を持つ若い世代の人物だと言う印象があった。鶴見俊輔に近いというのは今の日本社会では稀なのだ。特に若い世代では。読了後、関川氏は一九四九年生で決して若い世代とは言えぬ世代なのを知った。北朝鮮に対する考え方など刺激的であるが、私は日本現代を歴史的に把握しようとする姿勢に共感を覚えた。

論考中、山田風太郎の一九四五年東京医専学生当時の日記に記された考えが引用されていて、それに最も仰天した。

「・・・個人個人が最も頑強に抵抗するのは、新鋭澁刺としたアメリカ人のように思われる。各人がそれぞれの自覚と自信を胸中に抱いていて、最も屈服させ難いように考える。これは単なる知識の意味ではない。学校も家庭も社会もひっくりかえした教育の意味である。アメリカは強い。強さの根源は物量よりも「民主主義」にある。しかし、アメリカ人には致命的な弱点がある。それは彼等の戦争目的がせいじなことである。彼らは世界の警察権を掌握して、彼らのいわゆる「正義」を四海に布こうとしている。国家の宣言する正義なるものが果して存在するか否かは別として、国家の信奉する正義は個人の信奉する正義よりも脆弱なものであることは確かである。少なくともアメリカの正義には限界がある。然らば、彼等は無制限の殺戮戦に耐えられようか。「要するに、すでに富裕を愉しみつつあるアメリカが、さらにそれ以上の世界の警察権掌握のために、無限の血を流しつづけることを、国民の全てが了承するだろうかと言うのである。」

「それは、あまりに思い上がった、ぜいたくの沙汰ではないか。」と一九四五年の日本で、二十三才の山田風太郎青年はつぶやいていたのである。

湾岸戦争、九・一一テロに次ぐ、アフガニスタン、イラク戦争という現代史を二十三才の青年は明晰に予告していたのである。

関川は言う、「一九九〇年代を「失われた十年」と言いならわしているようだが、むしろ私は敗戦以来の「失われた五十六年」を思っている。「昭和二十年以前の「歳月と教育」の恐ろしさもさることながら、それ以後の「歳月と教育」の恐ろしさよ」と語る山田風太郎の言葉は痛く耳に刺さる。」

もう一度、山本夏彦の「戦前」という時代を読み直してみる。同じような事が述べられている。山本曰わく「私は日記をたいてい文語文、正しくは文語文もどきで書くから、ほかの人もそうかと思っていれば必ずしもそうではなかった。高見順日記には文語派はほとんどない。伊藤整には少しある。山田風太郎「戦中派不戦日記」は全文ことごとく文語である。「本は本とつながっているのだ。又、山本は「私は赤い鳥で育っている」と自ら述べていたのが印象的だった。大正デモクラシーの最後にいたと言っている。その大正を関川は、赤い鳥を女性原理の時代で、しかも今（二〇〇三年）現代に通じると言っている。男が、かわいいと言っ、男がやさしさを言う時代である。夜、塩野七生のサイレント・マイノリティ読み続ける。一日中、家を一步も出ず本を読み続けた日であった。

明日の全体ミーティングでの小レクチャー「現代の特質」のシナリオ原稿を書く。あらゆる創作は現代の内にはしか成立しない。そして、その現代は必らず、すでに歴史として書かれ得る近代との連続、それも圧倒的な連続の中にのみ把握する事は出来ない。あらゆる創作は歴史的な成果である。その意味では創造は極めて「さびしい」モノになり始めている。メランコリアなものにならないを得ないのだ。